

# 研究紹介：日本における宗教間対話と連携の実際 —媒介としての教団付置研究所懇話会を中心に—

西 康友（立正佼成会中央学術研究所）

## 1. はじめに

私は2015年に European Network of Buddhist-Christian Studies に招聘を受けた。そこでの発表内容を日本語・英語の論文にし、日本語版は『中央学術研究所紀要』第44号（2015年）、英語版は“Buddhist-Christian Relations in Japan: A Buddhist Perspective”, Perry Schmidt-Leukel (ed.), *Buddhist-Christian Relations in Asia*, Editors Sankt Ottilien, 2016 所収である。

本発表は、日本語版論文、拙稿「日本における宗教間対話と連携の実際—媒介としての教団付置研究所懇話会を中心に—」の研究紹介をする：1. はじめに；2. 立正佼成会と Buddhist-Christian dialogue；3. 教団付置研究所懇話会の概要；4. 教団付置研究所懇話会活動を媒介とした Buddhist-Christian relations；5. まとめ；【付録】I 教団付置研究所懇話会設立趣意書（全文）；II 天谷忠央「幸日出男先生に感謝をこめて」。本発表は、このうち2と3を中心に紹介したい。

## 2. 立正佼成会と Buddhist-Christian dialogue

日本における Buddhist-Christian dialogue は1960年代に庭野日敬・立正佼成会（RKK）開祖（庭野開祖：1906-1999）の宗教間対話・宗教協力関連活動から開始したと言えるだろう。

### 2.1. 庭野日敬・立正佼成会開祖と立正佼成会の活動（「法座」）

立正佼成会（RKK）は1938年に開祖庭野日敬・脇祖長沼妙佼によって創立された法華三部経を所依の経典とする在家仏教教団である。庭野開祖の開顕した法華経の本義に基づき、在家仏教の精神に立脚し、菩薩道の実践をとおして、人格の完成並びに家庭・社会・国家及び世界の平和境の建設に貢献することを目的とした在家仏教教団である（「立正佼成会 会員綱領」）。

庭野開祖は教団内活動において極めて重要な「法座」活動を展開し、日本国内に教会組織を構築して、会員綱領（1963年）に基づき RKK 会員を導いた。RKK 会員綱領の実現に向けて、日本全国に多数の教会（国内：238 教会・380 布教所、海外：16 教会・54 布教所）を設置し、教会長・教会スタッフ・会員の密接な連携協力の下に活動を推進している。

この活動の根幹が、RKK の救い救われの場であり、RKK のいのちともいわれる「法座」である。この法座は、会員の数人が集まり、その中の一人が人生苦を赤裸々に打ち明け、

仏教の四諦の法門・庭野開祖の法華経解釈に基づいた教会幹部などの指導によって、問題解決をしていく場である。法座の構成員は相談者・指導者（法座主）・観察者（相談者・法座主のやりとりを観察する。法座の場に参加しているこの人の苦も相談者と重なることが多く、相談者の苦を自分自身の苦として拝聴する者）である。これまで多くの人々が現実の苦から救われ、そしてそれを契機として真の信仰にめざめ、真の幸せをつかんでいる事例が多数ある。法座の中で、RKK 会員が救われていくことを実感する度に、私は「法座」が現在でも RKK 発展の基礎をなしていると確信する。

## 2.2. 庭野開祖による宗教間対話・宗教協力活動

庭野開祖は 1951 年に結成した新日本宗教団体連合会（新宗連）の第 2 代理事長に就任（1965 年）し、諸宗教者と協力して日本国内における宗教間対話の新しい局面を切り開き、その後国際的な宗教活動を展開してきた。

この頃と同時期に、長期的視点から、RKK は深くキリスト教を研究する必要性を認識し、有用な人材を海外の大学・キリスト教系の主要研究機関に留学派遣した。彼らはキリスト教に関連した研究で派遣先から学位 PhD を取得している。

庭野開祖と RKK は、国内外において宗教間対話を推進してきたが、観念的な事柄だけに捕らわれず、実際の活動に結実するように組織・施設の構築をしている。宗教間対話を議論する場としての雑誌“Dharma World”の刊行、および国際平和・宗教間対話活動を経済的に支援する庭野平和財団創立等をした。

庭野開祖が初めてキリスト教をはじめとする世界の諸宗教者と対話するのは、1955 年に東京で開催された第 1 回宗教世界会議である。庭野開祖もこの会議に参加し、世界の緊急課題が討議された。庭野開祖は 1963 年 9 月「核兵器禁止宗教者平和使節団」副団長として日本の宗教者達と共に欧米諸国を訪問し、ローマ教皇パウロ六世に平和提唱文を手渡している。

その当時、ローマ教皇庁はローマ教皇パウロ六世の主導の元に、「非キリスト教関係事務局」を設置して、キリスト教以外の宗教との対話に力を注ぎ始めた。仏教とキリスト教のそれぞれの変革活動の結果として、必然的に両宗教間の対話・交流の気運が盛り上がってきた 1965 年 9 月、庭野開祖は仏教徒として初めて第二バチカン公会議第 4 期開会式に特別ゲスト参加の招請を受け、パウロ六世と個別謁見し、宗教協力による世界平和への貢献を誓い合った。庭野開祖の第二バチカン公会議出席が実現したのは、2 つの理由による：(1) RKK が教団創立以来わずかな年月の間に著しく伸びた教団であること、(2) RKK 創立者が現存して活躍していること。

これを契機に、庭野開祖は「仏教徒とキリスト教徒の対話」の重要性をより一層認識し

た。その後、「カトリックを含めたすべての宗教を結ぶかけ橋になろう」と世界宗教者平和会議 (WCRP) 創設に決意を固め、その設立に邁進することとなった。アメリカの宗教者からの呼びかけもあり、庭野開祖は日米諸宗教者京都会議 (1968年1月22日)を30名の諸宗教者ととも開催し、「平和のための世界宗教者会議」(のちの WCRP)を1969年(ガンジー生誕100年祭)か1970年(第二次世界大戦終結・国連発足25周年)に開催したいと呼びかけたところ、この提案は満場一致の賛同を得た。また、1969年には第20回国際自由宗教連盟世界大会 (IARF、ボストン)に出席、このとき RKK は同連盟に加盟している。

各種準備実行委員会を経て、1970年10月に第1回 WCRP 京都会議が開催された。当会議には世界39カ国世界諸宗教指導者約300名が参集し、庭野開祖は共同議長、および日本宗教連盟国際問題委員会委員長・受入主催機関総責任者として、開会式のあいさつを務める。その後、RKK は WCRP 日本委員会を主導してきた。

1978年には、庭野開祖は第1回国連軍縮特別総会で世界宗教者平和会議代表として演説した。庭野開祖著『平和への私の提唱』を想起すると、この活動も一連の流れの中で自然な成り行きであることが理解出来る。この年には、第23回 IARF 世界大会 (オックスフォード)に出席し、IARF 副会長に就任した。

### 2.3. 庭野開祖の世界平和への理念

庭野開祖の活動の根幹はあらゆる人々の救済と世界平和の実現にある：(1) (ガンジー翁を模範とする) 非暴力の証明；(2)世界を一つにする宗教；(3)対立を超えるための実践・西洋と東洋を合わせた人類の道；(4)平和への献身が約束するもの；(5)人類の意識変革のための宗教協力である。庭野開祖の宗教間対話等の諸活動は全てこの思想の元に、揺らぐことなく推進されている。

庭野開祖は1979年には、これらの一連の活動を評価され、宗教界のノーベル賞といわれるテンブルトン賞を受賞している。

## 3. 教団付置研究所懇話会の概要

次に「教団付置研究所懇話会」について紹介する。

### 3.1. 教団付置研究所懇話会の設立

1990年代前半に日本では、臓器移植の是非を問うことに始まった生命倫理問題や、靈感商法(1990年、相談件数が最多を記録した)・地下鉄サリン事件等の反社会的集団が宗教の名を悪用して社会混乱させるなどの大きな問題が多発して、日本の全宗教者・宗教教団

の存立が問われる事態となった。反社会的集団が宗教法人格を取得したこと、またそれを可能にした宗教法人法の曖昧さが一般社会から非難された。宗教教団と社会との関わりがあり方が問われる中、米国で 2001 年 9 月 11 日に「同時多発テロ」が起こり、この傾向に拍車をかけた。一般社会からの不信は、日本における宗教団体の存在意義に関わる大きな問題であった。

### 3.2. 教団付置研究所懇話会設立趣意書

一般社会からは宗教教団の社会的責任の再確認、倫理観再構築が求められることとなった。個々の宗教者・宗教団体は、こうした大問題に対して、独力では対応しきれないと思われた。多くの宗教者は諸宗教者間（とくに諸宗教教団の専門研究員）のネットワークを構築し、相互の立場への理解と情報の共有を進めつつ、相互協力・交流を深化する必要性に迫られた。

国内外のこれらの事件により、日本では現代社会の諸課題（生命倫理問題等）の解決に向けて、当時の RKK／中央学術研究所（CARI）天谷忠央所長は、1990 年代に多発した宗教教団の存在を脅かす重大事件・諸問題への対処を考えるに当たって、重要な役割を果たすことになる教団付置研究所懇話会立ち上げに貢献した。諸課題を克服しつつ宗教の危機を乗り越えて、社会と教団に貢献するための教団付置研究所間のネットワークを構築する構想を具体的に実現する人として、当時の幸日出男・日本キリスト協議会（NCC）宗教研究所所長を訪問し、依頼した。天谷の手記からそのいきさつこそが、仏教徒とキリスト教徒との対話そのものの典型例であることが分かる（【付録】Ⅱ 天谷忠央「幸日出男先生に感謝をこめて」）。この二人が連携して、日本宗教界の多数を占める仏教系を始め神道系やキリスト教系の教団に呼びかけ、これらの協調・連帯活動を推進することを通じて、真の宗教性の復権を実現でき、宗教教団の社会貢献が可能となると考えられた。

### 3.3. 教団付置研究所懇話会の諸活動

教団付置研究所懇話会運営の原則は、設立の背景と必要性から、必然的に情報発信の自由・機会の平等と公平・運営の民主性に基礎付けられる。懇話会の特徴は、その構成員と会費・事務局運営に現れている。護教的な立場に陥りやすい宗派の教団組織と異なり、懇話会構成員は加盟研究所・団体の研究員である。この結果、現代の諸問題に対して処方箋となる自由な情報の発信・提供が期待される。懇話会加盟研究所・団体の会費や事務局運営負担などが教団の規模に関係なく一律である。

教団に付置された研究所・団体が懇話会へ加盟しており、19 会員研究所と 8 オブザーバー研究所がある。懇話会には年一回（9 月、ないし 10 月）の年次大会があり、同日に総会

が開催される。懇話会の分科会として4つの研究部会（宗教間対話・生命倫理・自死問題・宗教と法律）が設置されている。研究部会会員は、有志の加盟研究所研究員である。昨年には第16回年次大会が開催されている。各研究部会は、年に数回の研究会を開催しており、活発な議論が繰り広げられている。その議論内容は総会時に報告され、承認を得ることになっている。年次大会を開催した当番研究所からは、年次大会内容・各研究部会報告をブローディングスとして刊行し、加盟研究所に配布することが義務付けられている。

### 3.4. 立正佼成会の附置研究所としての中央学術研究所

私が所属するCARIは、立正佼成会の附置研究所である。広く思想・文化・科学等との関連のもとに、宗教、特に仏教を研究し、以って有用な人材を育成し、人類の文化と世界平和への寄与を目的として、政治・経済・社会・文化等のあらゆる分野の学識経験者の協力のもと、“基礎研究”および“今日の課題”に方向を与えながらさまざま研究活動を展開している研究機関を設立理念とする。

現在では、これらのRKK 関連諸組織・施設は庭野日鏡・立正佼成会会長の認可の元にそれぞれの事務局が運営をしている。RKKでは仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいる。

## 4. まとめ

最後に、庭野日鏡・立正佼成会開祖と立正佼成会の宗教間対話と宗教協力を通じた平和構築の一端を述べた。現在RKKをはじめとして日本仏教界との対話・交流は極めて盛んである。特にRKKは、国内における組織構築後、庭野開祖の積極的な平和思想に基づき、ローマカトリック教会等との対話・協力を積極的に推進してきた。RKKはこの積極的な平和路線の進展に合わせて、その組織・施設・人材をより一層充実させている：立正佼成会大聖堂建立（1964年）・佼成出版社設立（1966年）とDharma World創刊（1974年5月）・中央学術研究所設立（1969年）と宗教教団附置研究所の結集；庭野平和財団設立（1978年12月1日）など。

さらに、宗教教団附置研究所を結集して、1990年代前半に多発した問題（臓器移植の是非を問うことに始まった生命倫理問題、靈感商法問題・地下鉄サリン事件等の反社会的集団による大きな問題）に起因する日本の全宗教者・宗教教団の存立が問われる事態に対して、その解決に尽力している。私は、以上の宗教間対話に連携による諸活動が世界平和に導く礎として、テロや紛争・戦争を抑止させる具体的な特記事項の一つであると確信し、自負するものである。